
雨宿り

梅金魚

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨宿り

【Nコード】

N6218A

【作者名】

梅金魚

【あらすじ】

仕事帰り、気まぐれで寄り道した本屋から出ると、外は予想外の大雨だった。しかたなく軒先で雨宿りをしていると…

平気で嘘をつく奴がいる。それも日常的に、大勢の人間に対してだ。

つい数分前、軒先のビニール屋根からすたすと滴り始めた雨垂れは、ついに点から線へと変わり、雲ひとつ無かった空は、まるで昼夜逆転したように重く濁った。

今更後悔してももちろん遅いのだが、数十分前の俺はなぜか今日に限って、普段素通りしているこの本屋で、少し時間を潰して帰ろう、と思ってしまったのだ。

やっぱり真つすぐ家に帰るんだった。そうしていればきつと今頃、風呂で今日の仕事の疲れを取りつつ、タイルの溝にへばり着いたカビでも眺めていたことだろう。数十分前の俺よ、お前の選択は間違っていた。

つくづく自分の気まぐれと、今朝テレビの中から、「今日は傘を持たなくてもいい」と満面の笑みで嘘の情報を吹き込んだお天気キヤスターに腹が立つ。

どれくらいここに留まっただろうか。もう雨が止むことを願うのも忘れてぼんやりしていると、若い女が店内から出てきた。小さな顔に幼さの残る大きな瞳。服装もひらひらしていて、可愛い、という表現がよく似合う女の子だ。

彼女は俺から数歩分離れた場所で足を止め、止む気配のない雨を眺め軽くため息をついた。すると、そのため息に機嫌を悪くしたのか、急に雨が強さを増し、まるで彼女に抗議するかのように雨音が大きくなった。

ああ、これでまた当分帰れなくなった。しかし、可愛らしい女の子と二人きり、本屋の軒先で雨宿り。まるで恋愛ドラマの主人公になったようで悪い気はしない。

ところが、彼女はハンドバッグの中をこそごとと漁り、これまた女の子らしいピンクの折り畳み傘を取り出した。俺はどうやら主人公にはなれないらしい。

滝のように地面に叩き付けられる雨は濃い霧を立て始め、目に映る景色の輪郭を溶かしていった。

.....

傘を広げ終えた彼女と目が合った。

目があったというよりも、視線に気付き俺の顔を見た、と言うべきか。無意識のうちに彼女を凝視してしまっていたらしい。

変な人と思われただろうか？

「あの……」

彼女は少々申し訳なさそうに俺に歩み寄り、申し訳なさそうな声で言った。

「私、駅に向かうんですけど、もしよかったら一緒に行きませんか？傘ちっちゃいから少し濡れちゃうかもしれないけど……」

なんとということだろう。神様は俺を主人公に選んだらしい。

近くで見る彼女はさらに申し分なく可愛かった。

小さな傘に肩を寄せ合い、いろんな話をした。

彼女は二つ年下で、19歳の女子大生だった。見た目に違わず、人懐っこくて明るい女の子だった。

駅までの距離はそれほど長くはなく、別れの時間はすぐにやってきた。

少し名残惜しそうにしていた彼女は、別れ際に「電話番号を教えてください」と恥ずかしそうに言った。

二人が恋に落ちるのにさほど時間はかからず、二人は付き合い合うことになった。

それからの俺の生活は、幸せそのものだった。

一人暮らしの俺の家に毎日のように通い、コンビニ弁当ばかりじゃ体に悪いと、料理を作ってくれた。

二人でいろんなことをした。映画を見たり、ドライブしたり、一日中部屋でのんびり過ごしたり、冬には温泉旅行にも行った。

彼女とたくさんの時間を過ごし、思い出の数もどんどん増えていった。

しかし、別れは突然やってきた。

楽しい時間はあつと言う間に過ぎて行き、付き合い始めて1年が経とうとしていた頃。

俺たちこれからもずっと一緒だよな。そう言うとき彼女は少し困った顔をして、語り始めた。

「あなたにずっと隠していたことがあるの……もうあなたとは一緒にはられない」

予想外の反応に目を丸くしていると、彼女はこう続けた。

「私、本当はこの星の人間じゃないの。私は、この星の悪の組織と戦う為にモエモエ星からやってきた、戦うメイドさんだったのです！」

そう言うとき、彼女の体が眩しい光に包まれ、よくテレビで見かける、秋葉原のメイド喫茶の女の子のような格好に変身した。

……

そんなことがあるはずがない。なんだこの展開は。

我に帰ると、まだ空から降ってくる滝が轟音を立てており、目の前の景色はなにも変わってはいなかった。

どれくらい時間が経ったのだろう？それすらも理解できないほど妄想の海に溺れていたようなのだが、彼女が立っていた場所に目をやると、彼女は広げ終えた折り畳み傘のカバーをハンドバッグにしまっているところだったので、どうやらほんの数十秒しか経っていないようだ。

彼女を眺めつつ、自分の妄想に馬鹿馬鹿しさと情けなさを感じてみると、彼女が少々申し訳なさそうに歩み寄ってきた。

「あの…」

まさか。

「私、駅に向かうんですけど、もしよかったら一緒に行きませんか？傘ちっちゃいから少し濡れちゃうかもしれないけど…」

小さな傘に肩を寄せ合い、いろんな話をした。

雨は少しも弱まっていらないが、彼女と歩く駅までの道のりはとても居心地がよかった。

「あのさ」

「はい？」

「モエモエ星って知ってる？」

「なんですかそれ？」

「いや、なんでもない」

彼女は突然変なことを言い出した俺の顔を見上げ、笑った。

「面白い人なんですね」

俺は、今朝の嘘つきに心から感謝した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6218a/>

雨宿り

2010年12月8日18時47分発行